

### 高庵寺二十五世泰應顯三大和尚追悼

父泰應顯三が昨年11月22日に遷化し、本年1月9日に大練忌(四十九日)、3月1日に卒哭忌(百ヶ日)及び埋骨も無事に済み、今日この日を迎えることができました。これもひとえに檀信徒の皆様を支えがあったからと、心より感謝申し上げます。

今、心静かに亡き父のことを想い、皆様にその一端をお知らせすることで、追悼の代わりとさせていただきます。

最初に、本葬のリーフレットに掲載いたしました故人の経歴を簡単に再掲させていただきます。

大正9年10月26日

誕生

昭和10年2月11日

得度(14歳)

昭和13年4月8日

栃木県師範学校本科第2部入学(17歳)

昭和15年3月23日

同第2学年卒業(19歳)

昭和15年3月31日

栃木県那須郡黒磯尋常高等小学校訓導

昭和43年4月1日

安足教育事務所勤務(47歳)

昭和44年6月5日

高庵寺住職就任(48歳)

昭和48年4月1日

栃木県佐野市立旗川小学校長(52歳)

昭和49年4月1日

栃木県足利市立毛野中学校長(53歳)

昭和51年3月31日

栃木県足利市立毛野中学校長退職(55歳)

平成13年6月1日

高庵寺住職退任(80歳)

昭和44年11月1日に、祖父の活應清嵩が遷化したときは、父49歳のことでした。そのとき、私は17歳で高校2年でした。そのときはよく覚えていませんでしたし、何十年間も思い出すことがなかったのですが、昨年11月28日に本葬も無事に済み、夕刻寺に戻り、誰もいない本堂で、亡き父のため力一杯読経をしていたとき、突然40年前のあの日のことがありありと浮んでま

いりました。それは、同じく亡き祖父の本葬が全て終了し、本堂に飾られた祖父の遺影の前で呆然と立ち尽くしていた亡き父の顔でした。私も昭和 57 年に高庵寺副住職に就任してからは、父の手伝いをしており、父が住職を退任する数年前からは、ほとんど私が葬式や法事等をしておりました。住職と教師の二足の草鞋を履く大変さは、私自身、身を持って経験してきたところです。その当時、父は安足教育事務所の課長をしており、私とは比べ物にならない程大変だったはずですが。当時は、父の気持ちなど全く解りませんでした。あの日、40 年の時を超えて突然浮んだ父の表情が、今は心底解ります。自分の父親を失った悲しみももちろん大きかったでしょうが、明日から、いや今からのことを考えれば、呆然と立ち尽くすことしかできなかったのです。それからの教師退職までの数年間は本当に大変だったことと思います。

最晩年の父は、体は極めて健康で、最後まで自転車に乗れるほど元気でしたが、認知症はかなり進行しており、家族、特に母はかなり大変な思いをいたしておりました。皮肉なことに父の葬儀が終わった日に、市役所から届いた通知は「要介護認定 2」の内容でした。ご存知の方も多いと存じますが、認知症での同判定は、家庭で介護できるぎりぎりの段階です。困ったこともしょっちゅうでしたが、息子としては、父は最期まで幸せに過ごせたと確信しております。

私の知っている父の心底嬉しそうな顔は、天気の良い日に自由に自転車に乗っているときの顔です。偶然に何回か見かけたことがあるのですが、本当に心の底から楽しそうでした。後、小さい子どもが大好きな父でした。たまに一家全員で外食に行ったとき、近くに小さな子どもがいると、「ほう、ほう、やっっているな。」本当に楽しそうに眺めておりました。

そんな父を見ていると、ああこの人は本当は良寛のような生き方をしたかった人なんだと思います。堅苦しいことが大嫌いで、教員を退職後、曹洞宗の第 7 教区長（足利及び佐野の一部を含む栃木県最大の曹洞宗の区域の長）を拝命したときは、本当に大変だったろうと思います。名節に囚われず自由に生きたかったのだと思います。

そんな温厚な父でしたが、テレビのある画面を視ると、非常に興奮し、時には激高することがありました。それは北朝鮮がでてくる場面の一部のときでした。そこに、自分の戦中の本当につらい体験が投射され、感情が高ぶってしまうときでした。

あるとき、父の本当につらい体験を聞かされたことがございました。それがいつだったかは全く覚えておりませんが、内容はよく覚えております。それは、軍隊で何かの支給物が不足し、そのままでは自分たちのグループが酷い暴力を受けるということで、それからのがれるために、仲間と数人で、他のグループの弱そうな隊員を襲い、強奪したという内容でした。そのときの襲われた隊員の悲痛な顔を今でもはっきりと覚えているという話でした。普段接している父からは想像すらできないおぞましい話でした。「軍隊はいやだ。」「戦争はこりこりだ。」「平和がなにより一番だ。」これは、父の終生変わらぬ信念でした。教育者としても、宗教者としても、このことだけは貫き通した一生でした。

その父の運命の転機というべき資料がございます。身内の秘密を一部の方へとはいえ、公開することのためにいろいろございますが、今の時代、このことが父の意思を継ぐことと信じあえて公開させていただきます。もしこのことで不愉快な思いをされた方がございましたら、その全ては私の責でございます。あらかじめお詫び申し上げます。

翻って、私自身 34 年間の教職生活を終えようとしているとき、縁会って接してきた生徒たちに、平和の大切さを伝えることができたかと問われると、ただただ反省あるのみです。

とまれ、こうして父を無事に送ることができ、お寺をなんとか護持できましたのも、全てひとえに檀信徒の皆様への支えがあった賜物と心より御礼申し上げます。

4 月より、私もお寺の護持に専念できます。これから精一杯精進することで、皆様方から受けましたご恩に報いることができますように勤めることをお約束して、追悼の辞に代えさせていただきます。

表題「一通の親展(秘)文書」  
氏名長谷川 顯三

今年の10月26日で、満80年の、私だけの歴史のページが重ねられる。そのなかで、私のみが知っている、そして、語るべきのなかった一通の文書について、もう時効になっているので書くことにした。

昭和20年2月、一通の手紙が私に送られてきた。封筒の表には、(親展)と、(秘)の文字が朱印で押されており、宛名は私個人であった。封筒の裏の発信者名は、文部大臣官房叙任係であった。

内容の要旨は、軍政要員として南方に派遣されることになっているが、現地に赴任するに当たっての輸送事情が円滑にいかないので、待機していただくという内容だった。

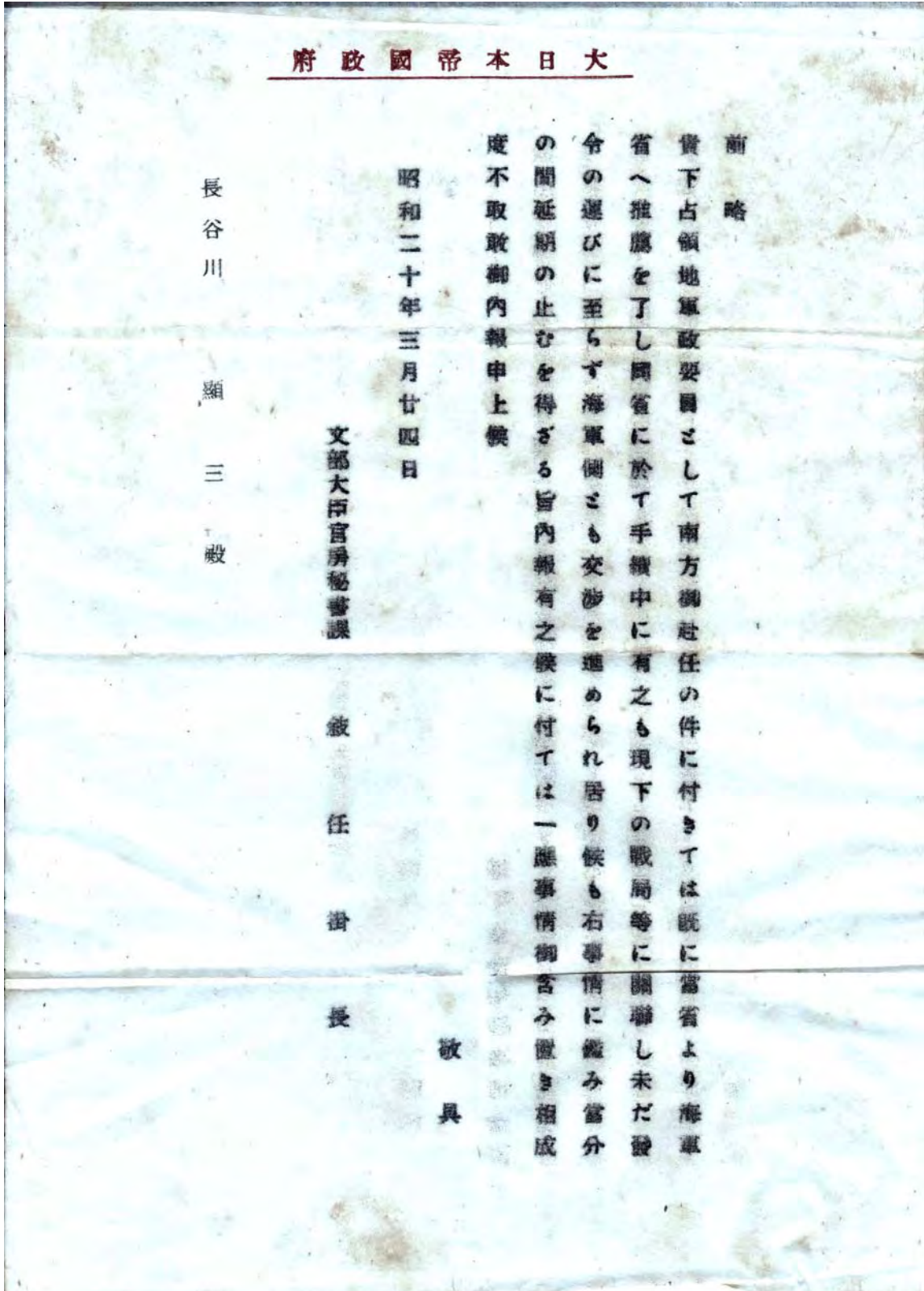
私は、この文書を、文部省からの指示どおりに私個人の文書箱にしまい、他人の目にふれぬようにした。勿論、私を推せんし、軍政要員として推せんしてくれた勤務校の学校長にも秘した。

それから半年後、昭和20年の8月、敗戦になった。私だけが承知していたこのことを、ついに推せんしてくれた当時の学校長にも、ひとことも語ることもなく、私の幻の履歴書のページは、私だけの幻の履歴となった。

1997年8月24日(日)9:50にクラムフル空港を離陸したMH801便機は、11:30クワン着陸。そして13:30にはコタキナバルに着いた。しかし、インドネシア側からの山林火災の煙を満し、私の幻の赴任地は、まさに幻、やがてまぼろしだった。



参考資料 2 : 文部省からの通知



「もし」は決して無いことだと承知のうえで申し上げますが、もし、父が予定通り軍政要員として派遣されていれば、今の私はなかったということに感慨深いものがあります。

参考資料 3 : 平成 12 年 10 月 26 日付けの兄弟宛の手紙

おはようございます。

おげんきで、すわやかなお目づめでーたか。

わたくしも、今日、十月二十六日、木曜日、満八十年一の  
生誕記念日を迎えたことになりました。

本音としては、よくもまあ、いまままで長期間をごまかして  
生きぬいてきたもんだと、われながらあきれはてています。

①

ひとりひとりの歴史をみて、ひよいとしたことから、本人自身も  
首をかしげるほど思いがけなページを綴るものだと思います。

もしもあの時、あのことが……。いままになった、今の自分の  
日々を思うとき、胸をしめつけられるような思いになる  
ことがあります。

わたくしが、清光、とめり意向に沿い、  
一九三八年三月、足利中学校卒業、ひきつづき、栃木県師範学校  
入学。この進路は、清光、とめりにとつて、最大の喜ぶだったと、  
いまでも、そう思われます。

なせならば——。当時、普通の身体をもった男の子は、満二十才  
即、徴兵——軍務——状況により戦死。まったく当然の  
ように、しくまわりました。

しかし——各都道府県に必置された師範学校卒業者は、  
卒業と同時に、とにかく当該県の連隊区司令部の直轄下、  
陸軍もしくは海軍の短期現役兵として入隊。半年間の

② 軍務終了後、除隊。以降、国民兵役に編入し、召集等  
のことは免除され、義務教育担当の者として、完全に身の  
安全を保持できる、恵まれた待遇を得られたのですから。

それなのに、ああ、それなのに、それなのに——  
私が師範学校に入学した、翌年、陸軍大将荒木貞夫と  
いう奴が、文部大臣になり、まさか、このこと——。

「師範学校卒業者の短期現役制を廃止し、一般徴兵と  
する。」



③

短現の廢止により、私の卒業年から、特典なしの一般兵役となり、甲種合格者は即入隊。私は、補充兵役となり召集令がくるのを、びくびくしつつ待つ身となりました。

一九四〇年支那事変は大東亞戦に拡大し、私の同級生の大半は現役入隊し、下級将校としてフィリピン、ニューギニア、そしてビルマと、各地で戦没していきましました。補充兵役だった私に召集令がきたのは、一九四四年の春を過ぎかけたころのことです。そのころには、もう、師範学校同期で現役で入隊したそのの優秀な者たちが、多数の遺骨となっていたわけです。

一九四四年八月三十一日、一回目の召集解除で、とにかく始めて帰宅を許されました。帰宅して、びくびくしていました。東京都からの、集団疎開児童が、本堂を占領していたのです。

☞ 大日本帝国も、もう終りになるよーと、思いました。



一九四四年九月一日から再び、軍服を脱し、山辺町国民学校  
高等科一年男組の担任教員に戻った私に、思いがけなない  
ことが、三ことが三ことだけに、まったく極秘のうち(ニろがり)で  
きました。

④  
当時の、山辺町国民学校長は、[REDACTED]さんという方で、県視学を  
されたことのある、うっぱはな先生でした。朝の職員集会のあと、  
日県の学務部からの文書だが、「[REDACTED]」と言って、学校長あての一通の  
書類を出し、日海軍省からの要請で、日本海軍の占領地に  
派遣する軍政西女員を一名推せんされたい」という内容を話して  
くれた。

私は、おぐさま、これにとびついた。十月を待たず、九月中にも  
臨時召集令状が私のもとへくることは覚悟をしていた。

[REDACTED] 先生の話に、まさに、日天命と、とびついた。



(5)

一九四一年の秋、彼岸のころ、召集解除で八月末に仲よく  
国府台の営門を出て、連れだって電車に乗り、おまけに  
姉と二人だけのぬいご家庭なので、ゼム昼飯をいっしょに  
食べて、それから別水しようと、池袋の自宅へ誘ってごちそうして  
くれた。くんから手紙が届いた。もう、それだけで  
察しがついた。再度の令状、つまり臨時召集がきたのだ。  
もうひとり、安心して話せる友人、長野県の日本発送電の  
発電所の技師、くんからは、山のゴボウを送って  
きてくれた。ヤッソク、おれの手紙を出したが、妹さんから  
返事がきて、兄は、再度の臨時召集で出張しましたと  
と、いう、ことで、いよいよ、おれもーかるとふるえた。  
秋も深まり、山梨のくんの結婚式に、清島おやじの  
おともをして、甲府在の布、施へおもむいた帰り、中央本線の  
電車が、長時間ストップし、Bが来襲を予感した。

⑥  
日々、不安の思いで、集団疎開関係の話題や、空襲が  
現在住んでいるこの地にも及ぶのか、不安やら、それにも  
まして、曰いつ、臨時召集がかかるのかと、という恐怖の念で  
毎日が不安だった。  
学校長の、先生は、あのことについて、完全に何も言わず  
だった。  
ほんとうに、おれは、いったい、どうなっているのか、  
清嶋と、おれ、の両親は、私の南方へ派遣されることについて  
ほんとうに、なにも知らずに、いたのだった。  
半年が過ぎたが、私のところへ、臨時召集令状は、ついに  
こなかった。文部省からも、海軍省からも、音沙汰なかった。  
—そして、ついに、一九四五年二月十日、紀元節の前日、  
明日の祝日に児童に配結する、みかんを箱から出し始めた  
そのとき、空襲警報が鳴った。



B29の第一回太田爆撃、そして御厨町の百頭への爆弾投下となり、八月十五日までの恐怖の日々が続いたのだった。


そうして状況のなかで、自宅に、**秘**親展の朱印が

押された。文部省からの親展文書が届いた。

この文書を、清宮、小坂が、私に無断で開封して、かくせんとしたのも、うなづけるものがある。

⑦

帰宅した私に、この**秘**文書をさしだしながら、嫌な顔で「親にも、内緒で、こんな、、、。しと、怒り、涙ぐんでいた。

あれから、もう、五十六年。もし、あのころ、私の乗る船があったら、赴任のため乗船していたら、フカのエサになっていたか。それとも、悪運強く、ジャングルに生き残り、色の黒い現地の娘さんともどもくっついて、オランカータンとじゃれていたか。ただひとり証人、元山辺国民学校長  先生、今は亡。